

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02506

研究課題名(和文) 哲学なき経済学は可能か 経済学方法論からのアプローチ

研究課題名(英文) Is it possible to be acquainted with Economics without philosophical thinking?

研究代表者

只腰 親和 (Chikakazu, Tadakoshi)

中央大学・経済学部・教授

研究者番号：60179710

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,360,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、同じ研究組織での過去の経済学方法論にかんする科研費研究(B21133047, B2528066)を基盤にして、経済学(方法論)と哲学との関連を明らかにしようとしたものである。経済学(方法論)と哲学との関連は、17-8世紀の近代の経済学の誕生以来、現代にいたるまで何らかのかたちで連綿と続いている。本研究グループはそのすべての成員が経済学史を研究地盤とする研究者なので、一方での各時代の経済学と、他方、古典経験論哲学から現代の科学哲学にいたる哲学との関連を分業によって解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

経済学と哲学とは、近代の経済学の誕生以来、切り離せない関係にある。例えばジョン・ロックは哲学者であって、有名な経済学の書物を著わしている。にも拘わらず、両者の関係を歴史的に丹念に追求した研究は多くない。もう少し厳密に言うと、20世紀中ごろ以降の科学哲学の動向には、一部の経済学者が関心を払ってきたが、科学哲学の成果を単純に受け入れるのみで、両者の内在的な関係を捉えてきたとは言えない。本研究では、現代のみならず、経済学の歴史を遡って経済学(方法論)と哲学の関係を立ち上げて考察してきたものとして、学術的・社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：With the aid of JSPS's grants, our research group had studied the methodology of economics from the historical viewpoint and published two books so far. This time, we thought it necessary to analyze the relation between economics and philosophy in the historical context in order to deepen the history of economic methodology. In the scholarship in this field, few attempts were made to clarify the historical relation between the two disciplines. As all of our research group are specialized in the history of economics, taking advantage of the merit, we have been able to address our problem.

研究分野：経済学方法論

キーワード：経済学方法論 経済学史 科学哲学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究グループは、「経済学方法論フォーラム」という組織としてすでに2回の科研費交付を受けているが、本研究では過去のそれらの研究をふまえて、経済学方法論と哲学の関係を立ち上げて検討しようと考えた。経済学、あるいは経済学方法論と哲学とは、17-8世紀における経済学の誕生以来、密接な関係にあるにもかかわらず、20世紀に入ってから科学哲学と経済学方法論の関連についての研究を除けば、十分な考察がなされてこなかった。

『国富論』の著者アダム・スミスが道徳哲学者であったことはよく知られているが、ロックやヒュームといった、今日では哲学者として知られている学者たちも経済学についての書物や論文を書いている。しかしながら、例えばヒュームであれば、彼の哲学は哲学者が研究し、彼の経済学は経済学者が研究するというように、経済学と哲学の関連を問う試みはこれまでで少なかった。

先に述べたように、20世紀以降に関しては科学哲学と経済学方法論の関連が問題にされるようになってきたが、その内実は科学哲学(および科学史)の分野の成果を、経済学方法論に機械的に受容するといった研究が大勢を占めていた。したがって、(哲学との関連を問うとはいえ)そのような現代の経済学方法論の在り方に関しては、専門家の間で批判や反省の声が上がっているというのが、研究史の現状であった。

そうした背景のなかで、本研究グループはそのほとんどが経済学史を研究母体とする者であるというメリットを生かして、18世紀から現代に至るそれぞれの専門領域の経済学者たちにおける、経済学(方法論)と哲学との関連を追及することを目指した次第である。

2. 研究の目的

上に述べたような背景のなかで研究に着手したが、研究グループの各自はそれぞれに固有のテーマをもっている。そうした各自の独自のテーマは尊重しながら、以下の三点を共通の問題関心とすることにした。

- (1) 経済学と道徳哲学・政治哲学の関係。
- (2) 経済学と自然科学との関係。
- (3) 現代における経済学と科学哲学の関係。

各メンバーがこれら三つについて必ずしもすべて取り組むということではなく、各自の専門に応じて少なくともひとつは念頭におきながら、根本の課題である、経済学方法論と哲学との関連にアプローチすることを研究の目的と考えた。

3. 研究の方法

本研究グループは、研究テーマが経済学方法論という専門的にかなり限定されたものなので、そのメンバーは全国に散在している。したがって日常の情報交換は、インターネットをできるだけ活用して実行した。

全メンバーが一堂に会する研究会を年に3回もうけているが、それが研究グループとしての主要な活動の場となった。そこではメンバーがその時点での研究内容を報告して、討論を行うほか、メンバー以外の研究者にも参加して頂いて、専門家としての知見を披露して頂いた。今回の科研費交付期間中においては、中澤信彦氏、佐藤方宣氏に報告して頂いたのは有益であった。

さらにこの科研費交付期間中、石田が米国のカールトン・カレッジに、久保と上宮が英国のケンブリッジ大学に在外研究を行い、現地での資料収集や関連する分野の研究者との交流に努めた。

以上のように、内外における研究者相互の交流が必ずしも自由ではなかったひと昔前までとは異なり、情報化、国際化が進んだ研究環境のなかで、それに応じたグループ研究の在り方のできる限り追及してきたつもりである。

4. 研究成果

2017年度から2019年度の年次別の研究成果は以下のとおりである。

2017年度

初年度にあたるこの年度では、前年に提出していた経済学史学会全国大会での独自のセッション開催への申請が認められ、本科研費研究の言わば出発宣言となった。学会は6月に徳島文理大学で開かれたが、当グループは「経済学の哲学的次元」というタイトルでセッションを設け、佐々木、原谷(その他に中澤氏)が報告し、廣瀬が討論者をし、只腰が司会を担当した。

佐々木の報告は、シュンペーターにおける因果性と相互関係性という問題を論じ、原谷は現代の経済学方法論者であるウスカリ・マキの存在論について報告した。

この年度ではこの他に、2回、全体の研究会を開いた。ひとつは8月末の小樽商科大学でのものであるが、ここでは、只腰、佐々木、松本、石田と中澤氏が報告した。このうち、佐々木は自身が取り組んでいるJ.S.ミルの『論理学体系』の翻訳に関連して報告を行ない、松本は、ブリストルにおける自然科学と社会科学との関連について報告したが、いずれも本研究のテーマに密接に関わるものであった。

12月に中央大学で開かれた研究会では、上宮と中澤氏がそれぞれ現時点での研究報告を行っ

た。

2018 年度

この年度では、7 月に只腰、佐々木編著で『経済学方法論の多元性』（蒼天社出版）を上梓した。この著には本研究グループの全員が執筆しており、各自の論文はそれぞれの学問的関心に基づくそれまでの各自の研究成果を発表したものであるが、本科研費研究の基盤ともなるものである。

この年度には全体の研究会を、5 月、9 月、12 月の 3 回開催する予定であったが、9 月の北海道大学での研究会は会の当日起こった地震のため本州方面からの参加者の多くは現地に行くことが出来なかった。そのため、北海道大学の佐々木と事前に現地に行っていた松本によって、今後の方針にかんして話し合いがもたれた。

5 月に関西学院大学で開かれた研究会では、只腰と佐々木が報告した。そのうち、「経済学方法論と新自由主義」と題した佐々木の報告は、ハイエクやフリードマンの経済学方法論とその哲学思想の関係にメスをいれるものとして、「哲学なき経済学は可能か」という本研究会のテーマにふさわしく、研究のひとつのひな型を示すものであった。

他方、只腰の報告は、本研究全体の指針にかんして提案するものであった。すなわち、本研究会のメンバーは全体として、18 世紀頃から現代にいたる経済学の歴史をほぼカバーしているので、各自が自分の専門に応じて、経済学(方法論)と哲学との関連を迫るといふ問題提起である。例えばスミスと経験論哲学、J.S.ミルと功利主義哲学、ケインズとムーアの哲学というようななかたちでの研究が提案されたが、細部は今後、変更の可能性をみとめながら大筋は全体の合意がえられた。

12 月の関西大学の研究会では、中澤氏を招いてパークの経済学と美学・哲学の関係について報告をお願いした。また、只腰が経済学と哲学の関係について、近代と現代とを歴史的に対比した報告をおこなった。

2019 年度

この年度は、5 月、9 月、12 月の 3 回、全体の研究会をおこなった。5 月の中央大学での研究会では、原谷と松本が報告した。原谷は、経済学における因果性の役割をテーマとして、とりわけ、説明、意図、メカニズムの 3 つの観点から報告を行った。そして、哲学的な因果性概念を整理することで、様々な主張のなかから単一の定義を採用するのが難しいことを示した。松本の報告は、プリーストリーにおける経済学と宗教の関係についてのものであるが、経済学、哲学、宗教が複雑にからみあうプリーストリーの所論について端緒的な分析をした。

9 月には、松本があらたに着任した北海道教育大学と小樽商科大学札幌サテライトで研究会が行われた。報告者は、グループのメンバーである上宮、廣瀬、佐々木と、ゲストとしての佐藤方宣氏の 4 人であった。

上宮は、これまでエッジワースについて研究をつづけてきたが、今回は本科研費研究のテーマにふさわしく彼の功利主義について論じた。つまり、エッジワースの経済学が功利主義とは独立であるというシュンペーターの見解に対して、彼の経済学がその功利主義と不可分であることを、さまざまな著作を用いて主張した。

廣瀬の報告は、20 世紀の新厚生経済学とその哲学的基盤に関してであった。1932 年に出版されたライオネル・ロビンズ『経済学の本質と意義』が一つきっかけとなり、さらに 1939 年に出版されたジョン・ヒックス『価値と資本』が、経済学から価値判断を引きはがし、「純粋理論」の性格を得ようとしたこと、しかしその結果、政策科学として言いうるものが限られるようになったことなどが論じられた。

佐々木は従来つづけてきたシュンペーターについて報告したが、今回はシュンペーターにおける心理と論理の問題に関して報告した。

ゲストの佐藤方宣氏には、「方法への懐疑と日本での議論」というタイトルで、報告をお願いした。氏の報告内容は、抽象的個人主義に立脚するオーソドックスな経済学に対して、歴史や制度を重視する反経済学的な系譜の経済学についてのものであり、その系譜との関連で、日本の現代における経済学批判についても興味ある見解を示した。近々、上梓する書物を想定した報告のようでも刺激的な内容であった。

12 月に日本大学で開かれた研究会では、久保がケンブリッジで遭遇した日本の経済学者についての報告があった。もう一つ、ゲストとして新進気鋭の若松直幸氏が報告され、リカードウ課税論における、方法論的論点について見解を示した。

この年度では、12 月に開かれた近代経済学史研究会(12 月 22 日、大阪経済大学)で、上述の『経済学方法論の多元性』の合評会が開かれた。当日は執筆者全員が参加できたわけではないが、活発な議論が行われた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 只腰親和	4. 巻 59巻1・2合併号
2. 論文標題 マカロクの経済学方法論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 経済学論纂（中央大学）	6. 最初と最後の頁 79-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原谷直樹	4. 巻 9月号
2. 論文標題 科学方法論と経済学：経済学を哲学的に考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 経済セミナー	6. 最初と最後の頁 37 - 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木憲介	4. 巻 10・11月号
2. 論文標題 J.S.ミルの経済法則概念：その現代的意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 経済セミナー	6. 最初と最後の頁 43 - 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shin Kubo,	4. 巻 71巻
2. 論文標題 A Note on Seven Letters from Piero Sraffa to Tsuneo Hori, Chief Editor of the Japanese Translation of Ricardo's Works and Correspondence'	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『経済学論究（関西学院大学）』、	6. 最初と最後の頁 165-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shin Kubo	4. 巻 39巻
2. 論文標題 Book Review: 'Heinz D. Kurz and Neri Salvadori, eds., The Elgar Companion to David Ricardo, Edward Elgar, 2015'	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of the History of Economic Thought,	6. 最初と最後の頁 614-617
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計8件(うち招待講演 0件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 .Egashira, S. and M.Nakatsugawa
2. 発表標題 "The Relationship between the Policy of Education and Economic Thought: A Case of JET Program in Japan,"
3. 学会等名 The Annual Conference of History of Economic Society, Royola University, Chicago, (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江頭進
2. 発表標題 「現代における市場の自由と人権 フリードマンとハイエクはどう答えるか」
3. 学会等名 第23回進化経済学会名古屋大会、名古屋工業大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoyuki Uemiya
2. 発表標題 A Hidden Aspect of the Economic Journal: Foxwell's Mediation between British and Japanese Economists in the 1890s
3. 学会等名 The 50th Conference of the History of Economic Thought Society, Balliol College, Oxford, (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Noriko Ihida,
2. 発表標題 'Methodological Implications of Thorstein Veblen ' s Theory of Human Nature: Why Should We Modify the Concept of “ Economic Man ” ?'
3. 学会等名 History of Economic Thought Society of Australia Conference 2017, (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上宮智之
2. 発表標題 「『エコノミック・ジャーナル』誌寄稿をめぐる日英経済学者の交流 - フォックスウェルと日野資秀 - 」
3. 学会等名 ケインズ学会東北部会 (経済学史学会東北部会共催) , 東北大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Akihito Matsumoto
2. 発表標題 ' James Mill on Joseph Priestley: A Reflection on Science and Religion'
3. 学会等名 Kyoto Conference on Classical Political Economy, 同志社大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shin Kubo
2. 発表標題 'Reforming Political Economy using Statistics: The Words and Deeds of Quetelet and Whewell'
3. 学会等名 he 21st annual conference of the European Society for the History of Economic Thought, University of Antwerp, (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐々木憲介、原谷直樹、廣瀬弘毅
2. 発表標題 セッション「経済学方法論の哲学的次元」
3. 学会等名 経済学史学会第81回全国大会, 徳島文理大学
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 只腰親和、佐々木憲介	4. 発行年 2018年
2. 出版社 蒼天社出版	5. 総ページ数 380
3. 書名 経済学方法論の多元性 歴史的視点から	

1. 著者名 Susumu Egashira	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 498
3. 書名 R. Leeson ed. Hayek: A Collaborative Biography	

1. 著者名 Susumu Egashira	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 196
3. 書名 M.Tadokoro, S. Egashira, and K. Yamamoto eds. Emerging Risks in a World of Heterogeneity	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	廣瀬 弘毅 (Hirose Kouki) (20286157)	福井県立大学・経済学部・教授 (23401)	
研究分担者	久保 真 (Kubo Shin) (30276399)	関西学院大学・経済学部・教授 (34504)	
研究分担者	原谷 直樹 (Haraya Naoki) (30707138)	群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部・准教授 (22302)	
研究分担者	佐々木 憲介 (Sasaki kensuke) (50178646)	北海道大学・経済学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	松本 哲人 (Matsumoto Akihito) (70735828)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	
研究分担者	江頭 進 (Egashira Susumu) (80292077)	小樽商科大学・商学部・副学長 (10104)	
研究分担者	上宮 智之 (Uemiya Tomoyuki) (80580828)	大阪経済大学・経済学部・准教授 (34404)	
研究分担者	石田 教子 (Ishida Noriko) (90409144)	日本大学・経済学部・准教授 (32665)	